【研究論文Ａ：査読審査採択論文】

1922-1992-2022：『ユリシーズ』が『ユリシーズ』になるとき[1]

小　林　広　直

要　旨

2022年２月２日に出版百周年を迎えたジェイムズ・ジョイス（James Joyce, 1882-1941）の『ユリシーズ（*Ulysses*）』（1922）は、今日ではアイルランド文学を代表する古典的な名著（Irish Classics）としての揺るぎない地位を確保しているが、そのような評価は出版直後から与えられていなかった。本稿では、ジョイスの死後50年を経て（当時の）著作権が消失した翌年に出版された1992年版ペンギン・クラシックス、中でも『ユリシーズ』に付されたデクラン・カイバード（Declan Kiberd）による序文、および彼が1981年に書評を担当したG・J・ワトソン（G. J. Watson）の著作及びその書評を再読することで、『ユリシーズ』がアイルランド文学を〈代表〉するようになった歴史的経緯と今日的価値――1922年から1992年、そして2022年へ――について再考してみたい。

Ⅰ．はじめに

2022年２月２日、20世紀で最も優れた小説（のひとつ）と称されるジェイムズ・ジョイス（James Joyce, 1882-1941）の『ユリシーズ（*Ulysses*）』は出版百周年を迎えた。世界中で『ユリシーズ』に関するイベントが開催されたわけだが、2019年に新設された「アイルランド文学博物館（the Museum of Literature Ireland（MoLI））は、政府やUniversity College Dublin、アイルランド国立博物館（National Library of Ireland）の協力を得て、“Ulysses100”というウェブサイトを立ち上げた（https://ulysses100.ie/about）。「デジタル・プラットフォーム（digital platform）」を謳ったこのプロジェクトの背景には、新型コロナウィルスの世界的流行以後、学会や研究会のみならず多くの文学イベントがオンラインで行われてきたという事情もあるのだろう。2024年以降、このウェブサイトの情報はMoLIの「デジタル・アーカイヴ（digital archive）」に保管され、「永久にアクセス可能（accessible in perpetuity）」にする予定だと言う。まさに『ユリシーズ』は、次の100年だけでなく、「永久に」読み継がれる〈古典〉と見なされているかのようだ。

日本でもこの記念日に合わせて、日本ジェイムズ・ジョイス協会のメンバーを中心に二冊の論集が出版された。下楠昌哉・須川いずみ・田村章編著による『百年目の『ユリシーズ』』（松籟社）と金井嘉彦・吉川信・横内一雄編著『ジョイスの挑戦――『ユリシーズ』に嵌る方法』（言叢社）である（本稿の筆者は、後者に「手紙を読む／読まないブルームを読む――『ユリシーズ』の手引きとしての手紙」

という拙論を寄稿した）。そして、ちょうど百年を経た2022年2月2日（水）を第1回とし、毎月2回、第1・3金曜の20：00〜22：00に、全22回の「22 Ulysses－ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』への招待」（https://twitter.com/22Ulysses2022）というオンラインイベントが開催され、筆者も発起人の一人として運営に参加した（イベント登録者は約600名、参加者は最大で300名を超えるものとなり、上述のウェブサイト“Ulysses100”にも掲載された）。

以上見たように今日ではアイルランド文学を代表する古典的な名著（Irish Classics）としての揺るぎない地位を確保している『ユリシーズ』であるが、言うまでもなくそのような評価は出版直後から与えられていなかった。本稿では、ジョイスの死後50年を経て（当時の）著作権が消失した翌年に出版された1992年版ペンギン・クラシックス、中でも『ユリシーズ』に付されたデクラン・カイバード（Declan Kiberd）による序文を再読することで、この作品がアイルランド文学を〈代表〉するようになった歴史的経緯について再考してみたい。

Ⅱ．1922年から1992年へ

ジョイス生没年
　1882.2.2-1941.1.13

第一次世界大戦
　1914-1918
『ユリシーズ』末尾
　“Trieste-Zürich-Paris, 1914-1921”
『ユリシーズ』出版
　1922.2.2
アイルランド自由国の成立
　1922.12.6
Penguin Booksからの5冊のジョイス本
　1992
『ユリシーズ』出版100周年
　2022.2.2

1922年は、英文学を専門にする者であれば誰もが知るように、『ユリシーズ』だけでなく、T・S・エリオット（Thomas Stearns Eliot, 1888-1965）の『荒地（*The Waste Land*）』が出版されたモダニズムの極点を示すannus mirabilis、「奇跡の年」である。本稿の表題に示したように、今回主として検討するのは1922年出版の『ユリシーズ』であるが、まずは右図にある幾つかの年号の意義を再考することから始めたい。

モダニズム文学を語る際に、第一次世界大戦との関連は必ず指摘される[2]。そして、『ユリシーズ』の最後には、ジョイスが7年間の執筆期間に滞在した3つの都市（トリエステ、チューリッヒ、パリ）と共に、「1914－1921」という年号が書かれている[3]。『ユリシーズ』は作者の40歳の誕生日である1922年2月2日にパリで出版され、迷信深かったジョイスは、2が4つ並ぶことにある種の運命を感じていたと言われている。そして、「アイルランド自由国（Irish Free State）」の誕生、すなわち700年に及ぶ英国支配からの（政治的）独立は、1921年12月6日に締結された英愛条約の一年後、1922年12月6日に達成される。これは言うまでもなく、「偶然の一致（coincidence）」であるが[4]、『ユリシーズ』の出版が、祖国アイルランドの独立と同じ年であったということは、本作がアイルランド文学を代表する「国民文学（national literature）」の地位を今日獲得していることから考えると実に感慨深い。

ここで、ジョイス批評、より正確に言えば、読者反応批評（reader-response）的なジョイスの受容史に関して考えるとき、重要なのが1992年である。改めて上図のジョイスの生没年にご注目いただきたい。1922年の象徴性を考える上で重要だと思われるのが、この1992年との関連だ。すなわち、この年に、ペンギン・ブックス（Penguin Books）から新たな版として、ジョイスの主要作品が5冊同時に刊行されたのである[5]。しばしば揶揄的に用いられる「ジョイス産業」（すなわち、世界中の〈ファン〉が新しい版が出版される度に本を購入する、という一種の商業主義的な状況）の一つの極点はここにあるとも言えるが、さらに強調すべきは、これら5冊のうち4冊の編者については、『ダブリナーズ（*Dubliners*）』はテレンス・ブラウン（Terence Brown, 1944-）、『若き日の芸術家の肖像（*A Portrait of the Artist as a Young Man*）』と『フィネガンズ・ウェイク（*Finnegans Wake*）』はシェイマス・ディーン（Seamus Deane, 1940-2021）、そして『ユリシーズ』はデクラン・カイバード（Declan Kiberd, 1951-）と、全員がアイルランド人で、しかも世界的に著名な文学研究者が執筆陣となって、「序（Introduction）」と「注釈（Notes）」が付されているという点であろう[6]。

このような言わばプレテクスト（pretext）の問題について、結城英雄は以下のように指摘している。

> アイルランドでジョイス受容が開始されたのは、そうした国際的な動向［アメリカにおいては猥褻裁判での勝利に始まる研究および研究誌（*James Joyce Quarterly*）の発行、ヨーロッパにおいては批評理論の趨勢］に抗しきれなくなったことによる。その契機が1982年のジョイス生誕百年祭で、このときジョイスがアイルランド人作家であると承認された。それに加え、アイルランドはすでに1973年にECに加盟しており、ヨーロッパの視点も受容する必要があった。そしてジョイス没後50年が経過した1992年、版権が切れ、ジョイスの主要4作の他、詩や劇や評論も含め、アイルランドの研究者によって解説と注釈がほどこされ、いずれもペンギン版で刊行された。アイルランドは『ユリシーズ』が出版された1922年以降、南北に分裂しており、ジョイス受容はカトリックを中心とする南のアイルランド共和国にとって、アイデンティティ確立の戦略でもあったのだ。（59、下線は引用者）

非常に重要な指摘であるが、上記の引用で下線を引いた箇所については、アイルランドの文学や歴史について知悉していない人にとっては、若干の補足が必要であろう。上で言及した通り、1922年は「アイルランド自由国」の成立年であるが、これは同時にプロテスタント住民が多い北アイルランドが英国の一部に留まる（アイルランド島には全部で32州あるが、アルスター地方の9州のうちの6州が今日の北アイルランドとなる）、すなわち南北分裂を意味した。その後、南部の26州は1937年に新憲法を制定して（7月1日の国民投票で採択され、同年の12月29日に施行される）、国名を「エール（Éire）」と改め、さらに1949年には英連邦から独立して「アイルランド共和国（Republic of Ireland）」となり今日に至っている。1937年の憲法において着目すべきは、カトリックには「特別な地位」が与えられており[7]、宗教的な保守色が非常に強いものであったということだ。このような状況に鑑みるに、結城が述べる「ジョイス受容はカトリックを中心とする南のアイルランド共和国にとって、アイデン

ティティ確立の戦略でもあった」という一文に読み取るべきは、他ならぬジョイスがカトリック教会を首尾一貫して徹底的に批判し続けたこととのある種の〈矛盾〉である。つまり、その「戦略」とは、アイルランドの「ナショナル・アイデンティティ」の中心にあるとされたカトリシズムをかつて苛烈に批判した人物であっても、20世紀後半においては「アイルランド人」として見做すことができるということ、ナショナリズムが本源的に持つ排他性に依拠した〈排除〉ではなく、寛容の精神に基づいて異なるアイルランド性を〈包摂〉してゆく契機でもあったということであろう。

このような「ナショナル・アイデンティティ」の書き換えこそが、1922年出版の『ユリシーズ』について、1992年にその「序」をデクラン・カイバードが書いたことの意義なのではないか、というのが本論の見立てである。つまり、1922年から1992年という時代の移り変わりの中で、それぞれの時代精神（エートス）を考慮しつつこの「序」を再読するとき、カイバードによる〈新しい〉ナショナル・アイデンティティ確立のための、まさしく「戦略」と呼ぶべき側面が見えてくるように思えるのだ。以下、この点を考察してゆこう。

Ⅲ．カイバードによる『ユリシーズ』「序」再読

まずはデクラン・カイバードの略歴を紹介する[8]。1951年、ダブリンのエクルズ通り――『ユリシーズ』の主人公、レオポルド・ブルームの家がこの通りの7番地に設定されている――に生まれたカイバードは、トリニティ大学を卒業後、オックスフォード大学ではジョイス研究の第一人者、リチャード・エルマン（Richard Ellmann, 1918–1987）に師事し、同大学で博士号を取得した。ケント大やトリニティ大学などで講師を務めたのち、1979年から2011年までアイルランド国立大学ダブリン校（University College Dublin）で教鞭を執り、長らく主任を務めていた。アメリカのノートルダム大学に移り、2023年現在も同大学に所属している。著作に、博士論文を基にした『シングとアイルランド語（*Synge and the Irish Language*）』（1979）や、『アイルランドの古典（*Irish Classics*）』（2000）、『『ユリシーズ』と私たち（Ulysses *and Us*）』（2009）、『アイルランド以後（*After Ireland*）』（2018）などがあるが、彼の名を一躍世界的に知らしめたのは、電話帳と見紛うほどの大著、1995年の『アイルランドの創出（*Inventing Ireland*）』である。本論が着目するペンギン・クラシックス版『ユリシーズ』の「序」は先に述べたように1992年に出版されている。

この「序」に関して第一に指摘すべきは、彼が冒頭に挙げたのが、まず何よりもジョイスの「平和主義（pacifism）」であったということだ。

> It is no accident that the last lines of *Ulysses* read ‘Trieste-Zürich-Paris, 1914–1921’. Joyce had to scurry with his family from city to city, in his attempt to avoid the dangers of World War I, as he created a beautiful book in a Europe on self-destruction.（Kiberd, Introduction, ix）
>
> 『ユリシーズ』の最後の行に書かれているのが「トリエステ――チューリッヒ――パリ、1914年から1921年」であるというのは偶然ではない。第一次世界大戦の脅威から逃れるために、ジョイスは家族と共に、都市から都市へと逃げ回らねばならなかった。自ら破滅に向かいつつあったそんなヨー

ロッパにあって、彼は一冊の見事な本を書いた。

この指摘によって鮮やかに提示されるのは、『ユリシーズ』が書かれた際の時代背景、ジョイスの分身である22歳のスティーヴン・デダラスが言うところの「悪夢（nightmare）」としての歴史が[9]、まさにヨーロッパに吹き荒れていたこと、すなわち戦争という圧倒的な「暴力（violence）」（x）の問題である。

カイバードはこのあと『ユリシーズ』という表題（ユリシーズはギリシャの英雄オデュッセウスのラテン語名）が示す「英雄（hero）」の問題を取り上げ、W・B・イェイツ（William Butler Yeats, 1865–1939）やレディ・グレゴリー（Isabella Augusta Gregory, 1852–1932）に代表されるリヴァイヴァリストたちが「古代のヒロイズム（ancient heroism）」（vii）を礼賛していたのに対し、ジョイスはもっと「モダン（modern）」であった、すなわち芸術家が扱うべきは「日常生活（everyday life）」であることに気づいていたと指摘している[10]。そして、この点を明らかにすべく、彼は次のような作者のエピソードを挿入するのである。

> When Wyndham Lewis spoke of the fighting Irish in a conversation, Joyce countered thoughtfully: 'That's not been my experience … A very gentle race.' Though abused by occupying armies since 1169, the Irish had been too shrewd or too pacific to place a disciplined nationwide army in the field of battle, and they had never fully rallied behind the intermittent risings led by idealistic minority groupings. Even the rebels of 1916 enjoyed scant support during Easter Week. It was only a widespread aversion to subsequent British violence, in the protracted execution of rebel leaders, which galvanized support later in the year. The victory of Sinn Fein in the 1918 election was due largely to its policy of strenuously opposing the conscription of Irish males to fight in World War I. In so far as nationalists became implicated in deeds of violence in the following years of struggle, they suffered regular reductions in popular support.（vii、下線は引用者）
>
> あるときウィンダム・ルイスが会話の中で、戦うアイルランド人について触れると、ジョイスはしばし考えを巡らせたあとで言った――「私の経験ではそんなことはありませんね。……とても気の優しい民族ですよ」。1169年［ノルマン人のアイルランド侵攻］以来駐留する軍隊に苦しめられながらも、アイルランド人は狡猾とも言える賢さのためか、あるいは平和を愛する気質のために、国土すべての戦場に規律訓練を受けた軍を配備することはなかった。時には理想に燃えた少数の集団が蜂起を起こすこともあったが、アイルランド人はその援軍に参加することもなかった。1916年のイースター蜂起でさえほとんど支持を得られなかったが、蜂起の指導者たちが長い期間に亘って処刑されてゆくにつれて、その英国の暴力に対して国内の怒りが広まってゆき、同年の後半になってようやく蜂起への支持が急速に拡大していった。1918年の選挙において、シン・フェイン党が勝利を収めた主たる要因は、第一次世界大戦にアイルランドの男たちを参戦させようと、徴兵が行われたことに対して、同党が強く反対する方針を打ち出したからだった。その後数年の間続いた戦闘［独

立戦争と内戦］で、ナショナリストたちが暴力行為に関わってゆくようになると、一般市民からの支持は毎年のように失われていった。

長い引用になったが、この部分の要点は下線部にある。ルイス（1882-1957）が「戦うアイルランド人（the fighting Irish）」[11]の話題を出したときのジョイスの返答――「私の経験ではそんなことはありませんね。とても気の優しい民族ですよ」――に言及することによって、カイバードは、英国による所謂700年の軍事的支配のことを皮切りに、20世紀初頭のアイルランドにおける数々の戦い、イースター蜂起（1916年）からシン・フェイン党の勝利（1918年）、第一次大戦、そしてそれに続く独立戦争（1919年～21年）と内戦（1922年～23年）において、アイルランド人がどれほど暴力を忌避してきたかを描き出しているということだ。

ここで、今度は90年代前半にこの「序」を書くに当たって、その背景にあったアイルランドの同時代史を簡単に見ておきたいと思う。90年代初頭という時代は、世界史的にはやはり冷戦構造の崩壊と、括弧付きの資本主義の「勝利」を挙げるべきであろうが、アイルランド国内に目を向けた場合、これまで述べた「暴力」という観点から、1991年のイースター蜂起75周年との関わりを意識せざるを得ない。三神弘子は、1960年代後半から始まる「北アイルランド紛争」が、武力行使を是とするナショナリスト史観を揺るがしたこと、所謂「修正主義史観（revisionism）」の問題に触れながら、現代アイルランド演劇を代表する劇作家トム・マーフィー（1935-2018）の言を引き、1991年の政治状況を端的に示している。

北アイルランド紛争解決のめどがたたない状況の中、1991年に実施された復活祭蜂起75周年記念行事は、非常に低調な雰囲気の中で実施された。この記念行事について、劇作家トム・マーフィーは、「修正主義者たちがどのような仮説をたてようとたてまいと、復活祭蜂起は起こったのだ。記念行事を政府が執り行った時の、あのあまりにも素っ気ない態度は理解しがたい。アイルランドという国が誕生した瞬間だったのに」と記している。マーフィーのコメントから、IRA暫定派との関連を指摘されることを恐れ、アイルランド政府が蜂起の記念行事を祝うことをしりごみしていた様子が読み取れる。(24)

事実、このあと和平に向けた動きは加速し、最終的には1998年の「ベルファースト合意（聖金曜日合意）」で、約30年続いた「北アイルランド紛争」に一応の終止符が打たれるわけだが、改めて噛みしめるべきは、カイバードがペンギン版の『ユリシーズ』の序を書いていた90年代初頭、未だテロリズムの問題が背後にあったことであろう。言うなれば、ルイスが述べた20世紀初頭の “the fighting Irish” というアイルランド人表象は、二度の世界大戦の間には影を潜めるものの、約1世紀の間、ずっと続いてきたということだ[12]。

つまり、本稿がここで強調したいのは、ジョイスと『ユリシーズ』の執筆、そしてカイバードとこの「序」の執筆の間にあるアナロジー、つまり相同的な関係である。彼らはそれぞれ同時代における

暴力の問題、そしてそれによってアイルランド人が誤った表象（misrepresentation）をされていることへの強い危惧があったのであろう。言わばカイバードは、「序」において一種のアイデンティティ・ポリティクス（identity politics）を行っているということに注意したい。ジョイスは、暴力的なアイルランド人という当時のステレオタイプ的な言説を『ユリシーズ』において覆そうとした、とカイバードが「序」において強調することは、1922年だけではなく、彼自身が属している1992年においても有効な〈反論〉であるということだ。

考えてみれば、私たちが自明のものと見なしている〈アイルランド文学〉という呼称は、常に曖昧なものである。私たちがここでアイルランドと言うとき、それは国民国家（nation-state）という政治的枠組みではなく、アイルランド島という地理的状況を指しており、そしてその文学において扱われる言語は、圧倒的に多くの場合、土着のゲール語ではなく、英語なのだ（そのことを明示するために、時にAnglo-Irish Literature――英語で書かれたアイルランド作家による文学――という用語が採用される）。もし、と仮定してみよう。1922年の自由国成立によってアイルランドが英国からの独立を果たしていなかった場合、私たちは依然としてジョイスを〈イギリス文学〉の作家として扱っていた可能性もあるわけで、それは例えば日本においてもオキナワ文学やアイヌ文学という呼称がしばしば用いられるのに対し、東北文学や関西文学という言葉はほとんど聞かないことに似ている。カイバードがジョイスをアイルランド人作家として語ることは、自身をアイルランドのナショナリストとして規定することに繋がり、そしてそれは同時に、その時点で提示されているアイルランド人像、すなわちアイルランドの「ナショナル・アイデンティティ」を書き換えてゆく試みだと言えるはずだ。

Ⅳ．G・J・ワトソンからカイバードへ引き継がれたもの

次に、カイバードがペンギン版の「序」で取った戦略には、先駆者がいたことを指摘しよう。北アイルランド出身のG・J・ワトソン（G. J. Watson）は、1979年に出版された*Irish Identity and the Literary Revival*において、全体の3分の1をジョイスの論述に割いているが、その章の最後で次のような指摘をしている。

> But, perhaps, and more fundamentally, the question of *Ulysses* makes its own valid political point, and even a courageous point, to a nation obsessed with the theology of its own politics, and ever-prone－as recent history all too painfully remind us－to retreat from the complexities of living into the simplicities of violence. (243)
>
> しかし、おそらくはより本質的なこととして、『ユリシーズ』が私たちに問うているのは、それ自体が政治的で有効な力強い主張、勇気ある、とさえ言える主張を、国家に対して行っているということだ。なぜなら、国家というのは、政治という名の神学に囚われているものだし、近年の歴史すべてが非常に強い痛みを伴って私たちに思い出させてくれるように、国家は常に生きることの複雑さから退却して、暴力という単純な行為に陥ってしまうものなのだ。

この引用での「近年の歴史（recent history）」とは、ワトソンの著作が発表された1979年という時代を勘案すれば、言うまでもなく北アイルランド紛争である。J・M・シング（John Millington Synge, 1871-1909）、W・B・イェイツ、ショーン・オケイシー（Seán O'asey, 1880-1964）と、20世紀前半を代表するアイルランド作家のアイデンティティの問題を包括的に扱った書物で、最も多くのページが割かれたジョイスに関する章の最後に「暴力」の問題が言及されたことは意味深長だ。

ワトソンは以下の『ユリシーズ』の引用を出してから、この「近年の歴史」が北アイルランド紛争であることを明示し、作家が沈黙を守ることは単に無関心から成るのではないことを指摘している。ナショナリズムを主題とする第12挿話で、レオポルド・ブルームは言う。

> Force, hatred, history, all that. That's not life for men and women, insult and hatred. And everybody knows that it's the very opposite of that that is really life.（*U* 12.1481-83）
> 力とか、憎しみとか、歴史なんてものは、みんなそうです。そんなのは男であれ女であれ、大事なもの、人生じゃないんです。侮辱とか憎悪とか。それにみんなわかっているはずです、本当に大切なものはむしろ正反対のものだって。

自らの「ナショナル・アイデンティティ」をアイルランド人としながら、父親がユダヤ人であるために、しばしば他のアイルランド人たちからユダヤ人として差別されてしまうブルームは、「愛（Love）」を「憎しみの対極にあるもの（the opposite of hatred）」として言祝ぐ（*U* 12.1485）。確かに第一次大戦だけでなく、イースター蜂起を端緒として過激化してゆく対英独立戦争の最中にあって、つまり敵に対する「憎しみ」だけでなく、実際の暴力（上記の引用では、"Force"に対応）が吹き荒れている時代にあって、「愛」こそがすべてであるとするブルームの主張は、戦闘的なナショナリストたちからは一笑に付されるだけのあまりにナイーヴなものなのかもしれない。しかし、私たちの人生、あるいはそのアイデンティティが愛と憎しみのどちらに基づくべきなのかと問われるならば、その答えは自明であろう。

奇しくもデクラン・カイバードは、20代後半にしてこの本について非常に鮮やかな書評を書いている。書評の冒頭で彼はこの著作が「完成された学識に基づく作品であると同時に、個人的な証言という行為そのものである（at once a work of consummate scholarship and an act of personal testimony）」と指摘し、北アイルランド出身のワトソンが置かれている状況に想いを巡らせる。

> It［this study］is an act of committed criticism in the deepest sense, the meditations of a man who hails from a strife-torn Ulster, who has lived and taught in a distinguished British university and who writes with serenity and poise under the pressure of the contemporary crisis.（97）
> ［この研究］は最も深い意味で、社会参加的な批評行為だと言える。つまり、争いで引き裂かれているアルスターから声を上げる者の、著名な英国の大学で教えながら暮らしてきた者の、同時代の危機がプレッシャーとなっている中、片方の側に肩入れすることなく冷静沈着を保って執筆する者の、

黙想録なのだ。

つまりカイバードは、ジョイスが第一次世界大戦やアイルランドの独立闘争という「暴力」に対抗して『ユリシーズ』を書いたように、ワトソンもまた同時代の暴力的な出来事と応答していることに、この著書の意義を見出すのだ。そしてカイバードも同様に、本論が上に引いた第12挿話のブルームの言葉を書評で引用し、「ジョイスの政治（the politics of Joyce）」とは「当時のヨーロッパを無意味な戦争に導いた英雄的価値観への批判（the heroic values which had just led Europe into a useless war）」であり、「それと同じ価値観が現在でもアイルランド人の多くの命を奪っている（［those］same values cost many Irish lives too）」と指摘する（99）。ある意味では、ワトソンの著作の表題にある "Irish Identity" をいかに構築してゆくか、という問題をカイバードはこの本を通じて学び、継承したのかもしれない。同時に、まさにアイルランド人＝暴力的というステレオタイプをいかに書き換えてゆくかという戦略は、作家であるジョイスにとってだけでなく、アイルランド人批評家にとっても常に重要な問題であったことが改めて確認できる。『ユリシーズ』の出版百周年を経て、カイバードのこの書評を読み返すとき、多くの表現が1922年の「序」でも再利用されていることに、そしてその主張の今日的な意義がいささかも失われていないことに驚かずにはいられない。

V.「悪夢」の歴史から〈ナショナル・アイデンティティ〉を構築すること

ペンギン版『ユリシーズ』の「序」でカイバードは、「悪夢としての歴史（history as a nightmare）」について書いたジョイスは、「ナショナリストによって崇拝された英雄的過去とは、英国の帝国主義の贈り物とでも言うべき、お墨付きを与えられた別ヴァージョンに過ぎない（the heroic past worshipped by nationalists was a licensed version of the British imperial present）」ことを看破していたとして、次のように続ける。

> The alternative ... was the courageous admission that there was no such thing as an Irish identity, ready-made and fixed, to be carried as a passport into eternity. Centuries of colonialism had denied the Irish the knowledge of who they had been or now were.（lxxiv）
> ［そのような単純な過去の（英雄への）崇拝に対する］代替案となるのは……勇気を持って以下のことを認めることだった。すなわち、未来永劫通用するような、アイルランドのアイデンティティは、既成のものとして、あるいは固定されたものとしては決して存在していない、ということである。数世紀に亘る植民地主義は、アイルランド人に、かつて自分たちがどのような存在であったか、また、当時どのような存在であるかの知識を与えてこなかったのである。

カイバードも他の箇所で仄めかしているように、〈ナショナル・アイデンティティ〉は、植民地であれ、宗主国であれ「既成」の「固定された」もの、つまり決して不変であるはずのないものだ。それは常にウェブサイトのように更新されてゆく、流動的なものと言えよう。現に2016年のBrexitの決定

を経て、今後スコットランドが英国から独立し（2014年の住民投票では独立に賛成が44％、反対が55％の僅差であった）、南北アイルランドが悲願の全島独立を成し遂げる可能性（実際、2022年に北アイルランドのカトリック系人口は初めてプロテスタント系を上回った）は高まっている[13]。帝国とて、「未来永劫」のものではないのだ。

「夜の街」を舞台にした『ユリシーズ』第15挿話「キルケ」のラスト付近で、英兵カーと口論になったスティーヴンは以下のように吐き捨てる。

> 奴が欲しいのは、僕の金と人生さ。だが欠乏が奴の主人であるに違いないんだ、例の奴の野蛮な帝国のためにもね。金なら僕は持っていない。
> He wants my money and my life, though want must be his master, for some brutish empire of his. Money I haven't.（*U* 15.4568-70）

ここでの「奴（He）」とは英国国王（king）、のことである。第一挿話で自分自身を、大英帝国とカトリック教会、その「二人の主人の召使だ（I am a servant of two masters）」（*U* 1.638）と自虐的に述べていたスティーヴンは、国王にもまた「欠乏（want）」、すなわち欲望という名の「主人（master）」がいると見抜いているのだ。そしてそれは偏に「野蛮な帝国」のためなのである。2023年を生きる私たちが、この「欠乏」こそが、今や地球そのものを破壊しつつあるグローバル資本主義を象徴する、と読むのは余りに牽強付会な読解であろうか。しかし、おそらくカイバードの顰に倣って、私たちは引き続き私たちの同時代の問題に引き付けて、『ユリシーズ』を読んでゆくべきなのだろう。戦争という圧倒的な暴力もまた、「欠乏」という名の「憎しみ」から生まれることは言うまでもない。

『ユリシーズ』の主人公を、カトリック・アイリッシュのスティーヴンから、ユダヤ系アイリッシュのブルームへとスライドさせていったことの意義は、出版100周年の2022年を経た今日、とりわけ富める者と貧しい者の二極化が世界的な規模で広がっている今日、改めて噛みしめるべき問題であると思われる。本稿は先に『ユリシーズ』が今なお〈イギリス文学〉として分類されるかもしれなかった可能性について言及したが、考えてみれば、『ユリシーズ』の主人公であるブルームは、ユダヤという民族的アイデンティティのみならず、宗教的にも特異な存在だ。ハンガリー出身のユダヤ人である父ルドルフは数々のヨーロッパの都市を転々としたあとに辿り着いたダブリンでプロテスタントに改宗したため、ブルームはあくまでもプロテスタントとして生まれ、モリーとの結婚に際してカトリックに改宗するのだ。つまり、ブルームは民族的にも宗教的にも多様なアイデンティティを持つ存在であり、それにもかかわらず『ユリシーズ』はアイルランド文学の古典となっている。いや、むしろジョイスにとっては「にもかかわらず」ではなく、「であるが故に」こそが重要なのだろう。つまり、アイルランド人や日本人などの「ナショナル・アイデンティティ」とは決して単一的でも固定的なものでもなく、常に変化を伴う、多様性（diversity）と異種混淆性（hybridity）においてこそ、その真髄があるわけで、ジョイスの慧眼は1922年の時点でその未来を見据え、カイバードの慧眼もまた1992年の段階で、そのような来るべき未来を見据えていたのである。

V．おわりに

1904年という（近）過去を書くジョイスは、1914年から21年までの7年間、同時代（現在）の「暴力」という問題と格闘しつつ、その悲劇から逃れるためのありうべき未来を構想していた。もし「古典」と呼ばれるものには、そのような3つの時間が含まれているとするならば、カイバードの「序（Introduction）」もまた単なる作品への「紹介」や「導入」を超えた、古典としての価値を見出すことができるだろう。

カイバードの「序」には次のような指摘もされている。

［A］great book had shown that not all people could cope with an image of their own condition. They thought that they were reading *Ulysses*, whereas the book had been 'reading' them, exposing their blind spots and their sensitive areas.（xviii）

偉大な本がこれまで示してきたのは、全ての人が自分自身の置かれている状況を的確に把握できるわけではない、ということだ。［『ユリシーズ』が出版されたばかりの頃、その本の真価を全く見抜けなかった］人々は自分が『ユリシーズ』を読んでいると思っていたが、実際にはこの本が彼らを「読んで」いた、つまり彼らが図らずも見えなくなっている部分や彼らが触れられたくない厄介な問題を暴き出していたのだ。

人種や宗教、あるいはセクシャリティにおいて、私たちは多様な価値観を認めることは〈常識〉であると学びつつある。しかし、「暴力」についてはどうだろうか。『ユリシーズ』は今後も、来るべき未来を予言し続けるだろう。あるいは、戦争であれテロリズムであれ、それを正しく憎み、「愛」に基づく世界を構築することが〈常識〉に登録されるその日まで、私たちは『ユリシーズ』を読み続ける必要があるのだろう。

最後に個人的な思い出話ならぬ「道草ばなし」をお許しいただきたい。本稿の筆者をジョイス研究の世界に導いてくださった早稲田大学名誉教授の清水重夫先生（1943-2017）は、常々ジョイス研究においてアイルランドという視点から見続けることの重大さを、アイルランドへの大きな「愛」と共に、説いておられた。そして同時に、日本の研究者がアイルランド文学を研究することの意義も模索されていたものの、ご退職後に準備されていたその研究成果は病のために遂には叶わなかったことが「非常に強い痛みを伴って」思い出される。アイルランド人がアイルランド人について語るときに、語る者は常に自身のアイルランド性と向き合い、そしてアイルランドが現在どのように表象されているかという問いと対峙せざるを得ない――意識的であれば無意識的であれ、その戦略の背後にあるものを第三者の、ブルーム的な〈アウトサイダー〉の視点から読み解いてゆくのは、〈外国人〉研究者のひとつの利点であり、「戦略」のひとつなのかもしれない。

注

1　本稿は2018年1月27日（土）に開催された、早稲田大学アイルランド研究所主催、新春放談シンポジウム「アイルランドのナショナル・アイデンティティ――自由国成立から北アイルランド紛争まで」での研究発表、「1922――ジョイスとアイルランド自由国」の内容に、大幅な加筆と修正を行って改稿したものである。なお、本文中の英文からの翻訳はすべて拙訳である。

2「モダニズム」に関しては、下記の定義を参照のこと。

二〇世紀初頭の実験的芸術運動。象徴主義、未来派、表現主義、イマジズム、ダダイズム、シュルレアリスムなどを含む。ヨーロッパの周縁地域出身の芸術家がパリを中心とする都市部に集まって芸術運動を展開した。一九世紀の伝統的な価値体系（とくにリアリズムの慣習）を廃し、意識的に作者と読者（受容者）との前提条件を無視した。物語の時間順序を破壊し（コンラッド、プルースト、フォークナー）、人物の思考の流れを意識の流れの方法で記述し、論理的思考表現の代わりに断片とアリュージョンによるコラージュの方法を用いた。（川口・岡本、272-73）

3　本稿では『ユリシーズ』本文からの引用はHans Walter Gablerが編纂した、所謂Gabler版（1986）に基づき、省略記号*U*に続けて挿話番号と行数を記す。なお、ガブラー版では、“Trieste-Zurich-Paris / 1914-1921”にも行数が振られており（*U*18.1610-11）、作品の一部と見なしていることが大変興味深い。

4　ジョイスにおける「コインシデンス」の重要性については、金井179-282を参照のこと。

5　『ユリシーズ』に至っては、長い注釈を加えた学生版も出された。なお、当時、著作権の保護期間は著者の死後「50年」であった（ただし現在では、1993年10月29日の欧州連合理事会指令によって、西欧諸国の多くは70年を採用している）。

6　『詩・エグザイルズ』の編者は英国出身の、J. C. C. Maysが務めたが、当時彼はUCD（University College Dublin）の所属であった（現在は同校の名誉教授）。

7　ただし、この一節は1973年に行われた第5回憲法改正によって削除されている。なお、1937年の所謂「デ・ヴァレラ憲法」の問題点について、カイバードは以下のように簡潔に指摘をしている――「デ・ヴァレラによる1937年の憲法は一般に公開される前に、カトリックの高位聖職者によって吟味されていた。……そのため、この新しい文書は、その要点としてはアイルランドを「主権を持ち、独立した、民主主義的国家」――実に多くの人々がかつて熱望した、精神的な象徴とも言える共和制――と宣言するのだが、アイルランドのカトリック教会に付与された「特別な地位」に関しては共和主義的な面は全くなかった（His 1937 Constitution was vetted by senior Catholic clergy before being unveiled to the public.... So the new document declared Ireland “a sovereign, independent, democratic state” in the abstract: that mystical republic for which so many had longed. But there was nothing very republican about the “special position” accorded to the Catholic Church in Ireland）」。つまり、1922年の自由国憲法と比べたとき、1937年憲法はプロテスタントに対しては全く「寛容で（generous）」なかったということだ（Kiberd, *Inventing*, 360-61）。

8　カイバードの経歴については各書の著者紹介、および下記のサイトを参照した。
https://irishstudies.nd.edu/scholars/emeritus-faculty/declan-kiberd/
http://www.ricorso.net/rx/az-data/authors/k/Kiberd_D/life.htm

9「歴史とは……僕が目覚めようとしている悪夢なんです（History ... is a nightmare from which I am trying to awake.）」（*U* 2.376）は『ユリシーズ』の中でも最も有名なフレーズの一つであろう。『ユリシーズ』における「悪夢としての歴史」という主題については、拙論を参照されたい。

10　この点はのちに出版された彼の『ユリシーズ』論でも強調されている点である――「ジョイスはたったの一日の詳細を記録することによって、日常生活に潜む奇跡的にすばらしい要素を明らかにすることができ、その結果、見慣れたものが驚くべきものになり得るのだと信じていた（He［Joyce］believed that by recording the minutiae of a single day, he could release those elements of the marvellous latent in ordinary

living, so that the familiar might astonish)」(Kiberd, Ulysses *and Us*, 11)。

11　ジョイスの友人であったメアリー・コラム（Mary Colum, 1884-1957）もまた、その自伝においてしばしば「戦う（fight)」という表現を度々用いている（ただし、実際の戦闘だけでなく、文化ナショナリズムの運動におけるイェイツやレディ・グレゴリーの奮闘ぶりを表現する際にも使用しているが)。中でも、1914年以降アメリカに移住していたコラム夫妻が、22年の独立と内戦の後、久しぶりにダブリンに戻った際、街に幾多の戦火の傷痕を見た彼女は、次のように書いている――「[港から汽車に乗っている間に出会ったアイルランド人たちは全くそうではなかったが] ダブリンに到着すると、私たちは戦うアイルランド人たちの只中にいた（But when we got to Dublin we were right in the middle of the fighting Irish)」(276)。

12　例えば、しばしば指摘されるように2001年の同時多発テロが起きるまで、多くのハリウッド映画ではテロリスト＝IRAという表象が数多くなされていた。この点はHelena Vanhalaの著作、特に第3章を参照のこと。

13　スコットランドの住民投票、および北アイルランドの宗派に関する情報については、下記のサイトをそれぞれ参照した。
https://www.bbc.com/japanese/61976476
https://www.afpbb.com/articles/-/3425347

引用・参考文献

Colum, Mary. *Life and the Dream*. Doubleday & Company, 1947.

Ellmann, Richard. *James Joyce*. New and rev. ed. Oxford UP, 1982.（『ジェイムズ・ジョイス伝』1・2　宮田恭子訳、みすず書房、1996年）

Joyce, James. *The Critical Writings of James Joyce*. Edited by Ellsworth Mason and Richard Ellmann. Viking, 1959. （『ジェイムズ・ジョイス全評論』吉川信訳、筑摩書房、2012年）

---. *Dubliners*. 1914. Edited by Terence Brown. Penguin, 1992.

---. *Finnegans* Wake. 1939. Edited by Seamus Deane. Penguin, 1992.

---. *Poems and Exiles*. Edited by J. C. Mays. Penguin, 1992.

---. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. 1916. Edited by Seamus Deane. Penguin, 1992.

---. *Ulysses*. 1922. Edited by Hans Walter Gabler with Wolfhard Steppe and Claus Melchior. Random House, 1986. （『ユリシーズ』ⅠⅡⅢⅣ　丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳、集英社文庫、2003年、『ユリシーズ　1－12』柳瀬尚紀訳、河出書房新社、2016年）

Kiberd, Declan. Introduction. James Joyce. *Ulysses*. Penguin, 1992.

---. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation*. 1995. Vintage, 1996.（『アイルランドの創出――近代国家の文学』坂内太訳、水声社、2018年）

---. Review of *Irish Identity and the Literary Revival: Synge, Yeats, Joyce and O'Casey*, by G. J. Watson. *The Review of English Studies*, vol. 32, no. 125 (1981), pp. 97-99.

---. Ulysses *and Us: The Art of Everyday Living*. Faber, 2009. （『『ユリシーズ』と我ら――日常生活の芸術』坂内太訳、水声社、2011年）

Rabaté, Jean-Michel, editor. *1922—Literature, Culture, Politics*. Cambridge UP, 2015.

Vanhala, Helena. *The Depiction of Terrorists in Blockbuster Hollywood Films, 1980-2001: An Analytical Study*. McFarland, 2011.

Watson, G. J. *Irish Identity and the Literary Revival: Synge, Yeats, Joyce and O'Casey*. 1979. 2nd ed. The Catholic U of America P, 1994.

上野格・森ありさ・勝田俊輔編著『世界歴史大系　アイルランド史』山川出版、2018年。

金井嘉彦『ガラス越しに見るジョイス』言叢社、2022年。

川口喬一／岡本靖正編　『最新　文学批評用語辞典』研究社出版、1998年。

小林広直「James Joyce *Ulysses* に見るStephen Dedalusと歴史について」『ほらいずん』第42号、早稲田大学英

米文学研究会、2010年、1-15頁。
鈴木良平『IRA』彩流社、1991年。
---.『アイルランド問題とは何か――イギリスとの闘争、そして和平へ』丸善ライブラリー、2000年。
三神弘子「映画が物語るアイルランド――『マイケル・コリンズ』と『麦の穂をゆらす風』をめぐって」『エール』第35号、2016年、21-39頁。
結城英雄「アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ジョイス(1)」『法政大学文学部紀要』第70号、2015年、59-70頁。
尹慧瑛「排除と包摂のはざまで――北アイルランドという地政学的空間」『アイルランドの経験――植民・ナショナリズム・国際統合』後藤浩子編、法政大学出版局、2009年、245-64頁。